

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02540

研究課題名(和文)九州方言における推論過程の言語化に関する実証的・理論的研究

研究課題名(英文) An empirical, theoretical study on verbalization in the reasoning process in Kyushu dialects

研究代表者

中田 節子(有田節子)(NAKATA (ARITA), SETSUKO)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：70263994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：九州方言の条件とモダリティの形式について、共時的・通時的観点から分析した。九州では、佐賀を中心に方言形式「ギ類」が分布し、標準語に比べて「ナラ(バ)類」の使用域が広い地域が目立ち、準体形式「ト」が挿入される場合がある。トの挿入は、ナラ(バ)類の時制節性に関わる面と、断定辞の分布に関わる面がある。ギ類の発達と衰退は「バ」との競合において、認識や事実用法を持ちえたかどうかに関係すると考えられる。「バッテン」と「ンバ」について、当初は条件表現の接続助詞だったが、バッテンは単純逆接に偏っていった一方、ンバは、マイナス表現に偏り、「～ならない」の下接を経て当為表現に固定したことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The conditional and modal forms of Kyushu dialects were analyzed from both synchronic and diachronic viewpoints. Kyushu dialects are noteworthy for two reasons: first, the distribution of the dialect form "gi:" is more marked than in standard Japanese; second, the form "nara (ba)" realizes a wider range of usages than that of standard Japanese. The development and decline of the gi-forms are thought to relate to whether or not they may have epistemic and factual usages in competition with "ba". The quasi-nominal form "to" is inserted before nara(ba). Whether or not to is inserted before nara(ba) is shown to be related both to the temporal nature of nara (ba) -clause and to the distribution of assertion forms. "Batten" and "mba", contrastive conjunctions of Kyushu dialects, are derived from the conditional form ba. Batten is biased towards expressions of contradiction, while mba is biased towards negative expression, in such a way that it is grammaticalized to expressions of necessity.

研究分野：言語学

キーワード：条件表現 モダリティ 九州方言 佐賀方言 甑島方言 準体形式 断定辞 逆接形式

1. 研究開始当初の背景

本研究は方言を対象にした推論過程の言語化に関する実証的・理論的な研究である。日本語標準語は、推論過程が明示化される条件形式と認識性および証拠性モダリティ形式が複数の形式に分化している(ト、バ、タラ、ナラ、ヨウダ、ラシイ、ソウダ、カモシレナイ、チガイナイ、ハズダ など)。標準語のこれらの諸形式の用法についての記述的研究は高度に細分化・精密化されている。

方言研究では個々の方言において特徴的な現象が中心に研究される傾向にあり、モダリティ形式は方言毎の特徴が現れやすく、九州方言においては、分化が進んでいる断定を表す方言形式の研究が盛んに行われている。

条件表現の歴史的・地理的変異において鍵となる準体形式の分布は断定辞と密接に関連する。条件表現自体は一般的に方言特有の形式がそれほど見られず、標準語と同じまたは同じ語源の形式が方言によって異なる分布を示すとされているが、九州方言には佐賀を中心に分布する「ギー」およびその複合形式が勢力を保っている。ギーは限定を表す「ギリ」が源とされており、標準語の条件形式とは語源が全く異なる。それにも関わらず、ギー系列の形式は標準語のバやタラの領域を覆っている。

以上のことから、九州方言は推論過程の言語化の言語変異の方向性を探るのに格好の材料であると言える。

2. 研究の目的

日本語の推論を表す言語形式のうち形式の分化が顕著な条件形式(逆接条件も含む)と認識性・証拠性を表すモダリティ形式について、方言特有の形式を豊富に持つ九州方言における当該形式の方言間の変異とその背後にある歴史的変遷を明らかにする。

代表者による現代日本語条件文研究において話し手の事実認識を表す「認識的条件文」の重要性が明らかにされ、その背景に標準語における日本語の文構造上の変化と準体形式の文法機能の変質があることが日本語史研究において解明されつつある。準体形式は句を受けるだけでなくモダリティ表現としても機能するが、地域により変異がある。

本研究は、方言特有の形式と標準語と共通する形式が共存する九州の諸方言の分布的特徴を明らかにする、方言特有の形式の発生と発達について地域文献の調査を通して解明する、という大きく2つの目的をもって行われた。

3. 研究の方法

3.1. 方言特有の形式の分布的特徴

条件節事態が発話時以前に関わる場合、その事態が成立したかどうか、言い換えれば真か偽かが発話時において定まっているといえる。この「真偽が定まっている」という意味的性質と「定まっている真偽を話し手が知

っているかどうか」という話し手の認識を基準に条件文を5つに分類した。前件の真偽が定まっていない**予測的条件文**、前件と後件が恒常的・法則的因果関係で結ばれていることを表す**総称的条件文**がある。前件の真偽が定まっていて、その真偽を話し手が知らないのが**認識的条件文**、その偽を話し手が知っているのが**反事実的条件文**、そして、前件が真、つまり事実であることを話し手が知っているのが**事実的条件文**である。以上の分類に基づき面接調査を行った。

日本語諸方言の条件形式、特にナラ相当形式による認識的条件文の方言バリエーションには全国的にみて(1)準体助詞を伴う場合と(2)準体助詞を伴わない場合がある。研究分担者江口はその違いを準体助詞の性質のみに求めるのではなく、準体助詞と密接な関係にある断定辞(ダ相当の形式)の性質にもあるという仮説を立証することとした。九州でいえば、宮崎方言では準体助詞「ト」+「ナラ」の形式が用いられる(1)のパターンなのに対して、福岡方言では準体助詞「ト」を用いるのに「ト」を伴わず「ナラ」単独になる(2)のパターンになっている。この違いを断定辞「ヤ・ジャ」の性質と関係づけて考察した。

3.2. 方言特有の形式の発生と発達

まず、九州西北部に分布する方言特有の条件形式ギーについて、その成立の背景を考察した。ギーの変化について、内的要因と外的要因を検討した。具体的には、前者として、(1)形式名詞由来のギーがどのような過程を経て条件形式となったのか、後者として、(2)ギーが条件表現として参入していく前の条件表現体系はどのようなものであったのか、をそれぞれ問題とした。後者の問題は、特に、ギーがなぜ九州西北部という特徴的な地理的分布をみせるのか、を明らかにすることに繋がると考える。

次に、室町時代中央語の条件表現に端を発する長崎方言の成立過程を探った。例えば、現代の長崎方言である逆接の接続詞バツテンと、当為表現センバは長崎の代表的な方言であり、語源説は諸説あるものの、成立過程が解明されているとは言えない状況である。そこで、それらがともに接続助詞バから発展し、条件表現だったものが次第に上記の用法として固定化した過程を明らかにした。さらに、現代長崎でも盛んに使用される終助詞バイについても、同じ「バ」という形式が含まれることから、音韻的条件から関連を調べた。

4. 研究成果

4.1. ギーの分布と準体形式

ギー系列の使用域は地域によって異なる。佐賀県(唐津地域を除く)では、ギーが広い世代で使用され、予測的条件文、反事実的条件文、総称的条件文、そして事実的条件文各用法にも分布する。共通語のナラ(バ)に相

当する「ナイ(バ)がギーを補うように認識的条件文を中心に分布している。

柳川市(福岡県南西部)で、ギット(-getto/-gitto)が、予測的条件文、総称的条件文において優先的な使用があり、ナラ(バ)が認識的条件文では優先的に、予測的条件文でも使用されることが調査で観察されている。

甌島里地区では、ギ類は総称的条件文、予測的条件文、反事実的条件文の各用法の一部で使用が認められるものの、当該用法で優先的に使用されるのは、「e語幹-ba(「バ」)」である。ナラ(バ)が認識的条件文だけでなく、予測的条件文にも使用される。上天草も甌島里以上にギ類の使用域が限定される。

ギ類の使用の地域によるばらつきは、ギ類にいわゆる時制の対立があるかどうかと対応する。使用域が広い佐賀ではギーに終止連体形接辞だけでなく過去形接辞(-ta/-da)が前接する。-ta-gi:は、過去の事態を表す事実的条件文で優先的に使われる一方、終止連体形接辞-gi:が未来の事態を表す予測的条件文に使用されることを考慮すると、この方言のギーに前接する終止連体形と過去形は非過去時制と過去時制の対立(絶対時制)として捉えられる。

一方、柳川、甌島里、そして上天草では、ギ類に過去形が前接しないのが普通である。これらの地域では、過去の事態を表す事実的条件文には「タリ-tari」の已然形に由来すると考えられるタラ(バ)、タイバが現れる。

佐賀方言では、-タナイ(バ)は常に過去を表し、共通語のように未来を表す予測的条件文に現れるようなことはない。一方、柳川、甌島里地区、上天草では-タナラ(バ)が認識的条件文だけでなく予測的条件文にも現れる。つまり、ギ類節に時制の対立があり、-タが常に過去を表す地域(佐賀)では、ナラ(バ)に前接する終止連体形接辞も過去接辞も絶対時制の対立として捉えることができる。それに対し、ギ類節に-タが現れない地域では、-タナラ(バ)は過去だけでなく非過去も表し、絶対時制とは言えない。

興味深いことに、準体形式「ト(=to)」は、ナラ(バ)節が絶対時制節ではない地域において、ナラ(バ)が認識的条件を表すときに限り挿入される。つまり、共通語の場合と同様のことが観察される。一方、ナイ(バ)節が絶対時制節である佐賀においては、ナイ(バ)が認識的条件を表す場合にも、トは挿入されない傾向が強い。

準体助詞トの挿入を「絶対時制化」として捉えるならば、佐賀方言の認識的条件文においてその機能は不要である。なお、佐賀方言でもトの挿入が比較的自然なことがあって、それは、対話相手によって談話に導入されたことがらを前提として述べるタイプの認識的条件文においてである。

まとめると、準体助詞トの分布は、当該方言の条件節の時制システムによって異なる。

時制接辞が相対時制として機能する方言では、トが挿入されることにより、その時制接辞が絶対時制として機能することが義務的となる。一方、時制接辞が絶対時制として機能する方言では、トが挿入されることにより、対話相手によって導入された事態であることを明示する。

4.2. 準体助詞の分布と断定辞の性質

共通語は準体形式を文末に置いていわゆるノダ文を作るときには断定辞「ダ」が用いられるのが普通である。しかし九州方言で名詞文やノダ文相当の文を作る場合、断定辞に相当する形式が用いられる地域と用いることができない地域がある。福岡市・佐賀市・熊本市はいずれも断定辞「ダ・ヤ・ジャ」が生起しない地域であり、「行くんだ」にあたる形式は「イクト{ダ/ヤ/ジャ}」は不適格で「イクト」のみ適格である。宮崎市ではこのような制限はなく、「イクト」に加えて「イクト+ヤ」にあたる「イクチャ」という形式も用いられる。

本研究では、ノダ文相当の形式に断定辞が生起するかどうかという条件と、ナラに準体形式がつけられるかどうかという条件が関係づけられるという分析を提案した。具体的には断定辞が付けられる方言では「準体形式+ナラ」が用いられ、ノダ文に断定辞が付けられない方言では準体形式なしの「ナラ」が用いられると考えた。その関係を取り持つのは、「ノダ」で終わる文と「ノ」だけで終わる文のモーダルな意味の範囲の差である。野田(1993)の指摘にあるように、「ノ」で終わる文はいわゆる「対事的モード」は表せない(「そうか、このスイッチを押すんだノ*押すの」)。対事的モードは「既定的だが話者はその真偽を知らない」という認識的条件文の特質とマッチするものであるが、ノダ文で断定辞を使えない方言は、この対事的モードを「準体形式+ナラ(断定辞の活用したもの)」で担うことができないのではないかと考えるのである。本分析の特徴は、表面的な形態論的制限を文法形式の方言差の説明に応用するため九州方言以外にも適用可能という点にある。

また、推論課程と間接的に関わる選択候補句「お茶とコーヒーと(どちらがいいですか)」のような表現の統語論的性質について考察した。

さらに、方言調査を進めていく過程で、各方言の終止形と活用のタイプとの相関関係に特徴があることが明らかになった。また、東九州の大分方言にはこれまで形式としては出てこなかった「テカラ」という条件形式が見られ、さらに調査する必要が出てきた。これらは今後の課題とする。

4.3. 「ギー」成立の背景

(1): ギーの用法は予測(総称)反事実的条件文の用法が最も広く分布しており、認識、

事実的条件文は地域差がある。さらに、里方言では、認識、事実においてギーの衰退が著しい。よって、現代におけるギーの用法は予測・反事実的条件文を中心とすると言える。次に、ギーの異形態は「ギー」「ギー+ニ/ワ/ニワ」「ギー+ト」の大きく3系統に分けられ、中でも「ギー+ニ/ワ/ニワ」形が最も広範囲に分布している。以上のようなギーの特徴は、共通語における「場合・時に/には」等の周辺の条件表現形式に類似している。ギーはこのような「形式名詞+ニ」で時間副詞句として用いられる用法から発達したと推測した。18世紀上方語では、ギリは前接に「明日」のような時間名詞を伴う率が約67%、後接助詞は、ニを伴う率が最も高く約半数を占める。結果、「明日ギリに」といった時間名詞が前接、助詞ニが後接する例がギリの使用の中では最も多く約33%を占める。これらはいずれも時間副詞句として機能している。この結果は、先の推測と矛盾しない。しかしながら、18世紀上方語におけるギリは期間限定の時間副詞句であり、共通語で条件表現形式化している時間副詞句はいずれも時期限定である。よって、更にギリ自体の意味が期間を表すものから時期(特定の時)を表すものへと変化する必要があるが、この点はまだ十分に裏付けができておらず今後の課題である。

(2): 近世末期佐賀方言では、すべての用法でレバが用いられており、その下位形式としてナレバがある。中央語のようなタラ・ナラもわずかに観察されるが、佐賀方言においては、これらの形式の分化が進まず、レバが広く条件表現を担う体系が近世末期まで続いていたことがわかる。ギーは1例のみ観察され、ギーの条件形式としての成立は近世末期頃と推定される。現代佐賀方言においてギーもほぼすべての用法を担うことができることから、当該地域において条件表現は形式を分化させる方向ではなく、特定の形式を用いその形式が交代していくという変化の方向であったと考えられる。今後更に時代語との詳細な調査、近隣県との体系の比較等をする必要がある。

4.4. 逆接条件形式の成立

室町時代中央語に端を発する長崎方言の成立過程をテーマに以下の3つの語について分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) バッテンについて

バッテンは現代では逆接の接続詞であるが、近世長崎資料には「逆(トテ)」と注記されたものがあり、また、俗謡の使用例に譲歩的な用法があったことから、元々「接続助詞バ+トテ(モ)」であり、条件表現バから発展したものである可能性が高いことを指摘した。

(2) ンバについて

現代では当為表現として専ら使用される(センバ)であるが、近世中期には後項がプラス表

現マイナス表現の両方とれる中立的条件表現だったことから中央語の「~ネバ」に由来すると考えられ、近世後期頃からはマイナス表現しか下接せず、次第に「~なければならぬ」という当為表現に固定した過程を明らかにした。なお、ンバの成立は20世紀初頭であることが明らかになった。

(3) バイについて

近世には終助詞バにナ、ヨなどを下接したバナ、バヨ、バイ、「あんた」を下接して変化したバンなどが作られたが、バイの優勢によって語基「バイ」が成立し、大正末年の頃にはバイノ、バイノウシのように若年層を中心に[バイ+]の語が形成された。その後も、バイナ、バイネという新しい形が現れたが、現代はほとんど単独のバイ一種類に収斂しつつあることを確認した。

上記の研究を本プロジェクトの中に置いたとき、バッテン、~ンバともに九州地方で条件表現としては衰退に追い込まれつつあるバが新たに別の用法を獲得して生きつづけている語であることが明らかになった。

バイに関しては直接条件表現とは関わらなかったが、現代長崎地方ではバを含む方言形が顕著であることからその音韻環境と語形を研究する中で条件表現との関連を探った。今後、さらに他のモダリティ形式や格助詞バ、ノなどの調査を進め、中世から現代へとつながる長崎方言の推移を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

有田 節子、書評論文: 仁田義雄著『文と事態類型を中心に』、日本語文法 18-1、2018、29-37、査読有

岩田 美穂、「近世末期佐賀方言資料にみられる条件表現」12、pp.80(1)-63(18)、査読無、2018

江口 正、選択候補句の統語論的性質、福岡大学研究部論集 A: 人文科学編 17 巻(4号) 2017、59-62、
<http://id.nii.ac.jp/1316/00004272/>

前田 桂子、長崎方言のバイ類の変遷について 近世近代の長崎資料を中心に、筑紫日本語研究 2017(筑紫日本語研究会) 査読なし、2018、(印刷中)

前田 桂子、肥前地方の当為表現「~ンバ」概観、筑紫日本語研究 2016(筑紫日本語研究会) 査読なし、2017、pp.38-47

前田 桂子、肥前方言の当為表現ンバの推移 - 方言書および方言調査を手がかりに -、国語と教育、査読なし、41号、2016、pp.左14-26

前田 桂子、近世長崎のバツテンについて、筑紫日本語研究 2015(筑紫日本語研究会)、査読なし、2016、pp.53-62

有田 節子、日本語教育における(ノ)ナラ条件文の扱いについて-認識的条件文の重要性-、言語科学研究、6 巻、2016、pp.1-13

前田 桂子、『瓊浦通』における長崎方言について、国語と教育、査読なし、40 号、2015、pp.21-35

有田 節子、日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について-係助詞から感動詞へ-、国立国語研究所論集、9、2015、1-22、査読有

[学会発表](計 16 件)

有田 節子、提題形式から談話標識へ：発話冒頭に現れる八の単独用法について、International Symposium on Japanese Studies “Tradition and Innovation in Changing Japan”、2018

有田 節子、岩田 美穂、江口 正、前田 桂子、方言条件形式の多様性 -九州方言を中心に -、日本語学会秋季大会、2017

岩田 美穂、条件表現形式ギーの成立背景についての考察、日本語文法学会第 18 回大会、2017

前田 桂子、長崎方言のバイ類の変遷について 近世近代の長崎資料を中心に、筑紫日本語学研究会、2017

有田 節子、方言文法研究から見えてくるこれからの日本語文法研究：方言特有の文法形式の記述をめぐって、日本語教育国際大会、2016

有田 節子、条件文の時制とモダリティの意味論-方言条件形式「ギー」をめぐって-、日本言語学会第 153 大会公開シンポジウム、2016

ARITA, Setsuko, Temporal and modal functions of conditionals in the Kyushu dialects in Japanese, International Conference on Asian Linguistics, 2016

有田 節子、九州方言における(ノ)ナラ相当形式の分布 時制節性からみた条件表現の体系についての一考察、平成 28 年度 国際共同研究促進プログラム主催シンポジウム、2016

前田 桂子、肥前地方の当為表現「～ン

バ」概観、筑紫日本語学研究会、2016

ARITA, Setsuko, Temporal and modal expressions in Japanese conditionals, 45th Poznan Linguistic Meeting, 2015.

前田 桂子、『瓊浦通』における長崎方言について、長崎大学国語国文学会、2015

前田 桂子、近世の文献に見る長崎方言バツテンについて、日本近代語研究会、2015

前田 桂子、近世長崎のバツテンについて、筑紫日本語学研究会、2015

[図書](計 4 件)

有元 光彦、前田 桂子他、明治書院、山口県のことば、2017、184(135-146)

前田 富祺、前田 桂子他、和泉書院、国語語彙史の研究 36 巻、2017、340(231-250)

有田 節子、江口 正、前田 直子、矢島 正浩、鈴木 泰、青木 博史、日高 水穂、三井 はるみ、竹田 晃子、日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史的変遷、くろしお出版、2017、256

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田 節子(有田 節子)(NAKATA(ARITA), Setsuko)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授
研究者番号：70263994

(2) 研究分担者

江口 正(EGUCHI, Tadashi)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：20264707

前田 桂子(MAEDA, Keiko)
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号：90259630

岩田 美穂(IWATA, Miho)
就実大学・人文科学部・講師
研究者番号：20734073